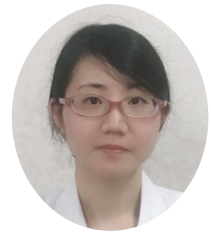


骨髄バンク推進月間に寄せて

琉球大学病院 検査・輸血部 宮城 理子



例年、10月は骨髄バンク推進月間です。骨髄・末梢血幹細胞移植を必要とする患者への理解を深め、ドナー登録の意義を広く社会に伝えるため、全国各地でさまざまな啓発活動が行われます。近年、血液悪性腫瘍および類縁疾患の診療は分子標的薬やキメラ抗原受容体遺伝子改変T細胞（CAR-T細胞）療法により、日進月歩の進歩を遂げています。これまで治療が困難であった超難治疾患に対しても選択肢が広がり、従来は実現不可能であった生命予後の改善や生活の質の向上が期待出来る時代になりました。

一方、新たな治療法が次々と登場する現在においても、造血幹細胞移植が不可欠な治療法の一つであることに変わりはありません。白血病、悪性リンパ腫、再生不良性貧血など、薬物療法のみでは治癒が難しい血液疾患に対し、造血機能と免疫機能を再構築する造血幹細胞移植は根治を目指し得る重要な選択肢です。とりわけ、非血縁者間の骨髄移植や末梢血幹細胞移植は適合するドナーが存在し、登録から提供までを支える社会的な仕組みが整って初めて実施できます。移植を必要とする患者は全国で毎年約2千人に達するとされる一方、若年層のドナー登録者確保は長年の課題となっています。将来にわたって移植医療を維持するためには幅広い世代に制度の重要性を啓発し、登録に繋げていく必要があります。

沖縄県においても、県民の皆様に移植医療に関する知識の普及と骨髄提供希望者の登録拡大に取り組んでいます。中部保健所、くもじ献血ルーム、献血バスなどが登録窓口となり、登録の機会が確保されています。ドナー登録は登録した時点ですぐに患者と結び付くものではありませんが、HLA型が適合した場合、遠く離れ

た患者に移植の機会を届けることが出来ます。ドナー登録と実際の提供は決して善意だけで成り立つものではありません。医学的な安全性の確保、十分なインフォームド・コンセント、家庭や就労環境への配慮が不可欠です。登録後に適合通知を受けた場合でも本人の健康状態や家庭、仕事上の事情などにより提供に至らない場合もあります。そのため、登録の段階から適合後の検査や調整、提供までの流れを分かりやすく説明する必要があります。骨髄採取と末梢血幹細胞採取の違い、入院や通院の見通し、身体的負担、健康被害が生じた場合の補償制度について丁寧な情報提供が求められます。事業所におけるドナー休暇制度への理解を広げることも提供しやすい環境づくりに欠かせません。

多くの離島を抱える沖縄県では医療資源へのアクセスや移動の負担に地域差があります。こうした地域特性を踏まえ、沖縄県、保健所、日本赤十字社、沖縄県赤十字血液センター、骨髄バンクを支援する団体、医療機関が緊密に連携し、登録機会や相談体制を維持していくことが重要です。特に若年世代に対しては献血や学校教育、職域での健康教育と組み合わせ、ドナー登録自体を将来の医療を支える社会参加の一環として実践していただく工夫が必要です。血液内科専門医には急速な進歩を遂げる血液診療の全体像を踏まえながら造血幹細胞移植の意義を正しく伝える専門職として、また、地域から信頼される情報発信者としての役割が大いに期待されています。骨髄バンク推進月間を契機に医療者自身も制度に対する理解を深め、患者に寄り添いながら、沖縄県民へ正しい知識を届けていく不断の努力が大切です。「いのちをつなぐ」輪を一層、広げていきましょう。